2022 年度

iTL 先端的プロジェクト奨学金 研究成果最終報告書

ドキュメンタリー+制作ノート

故郷よ～更地となった現場で～

制作ノート

中央大学国際情報学部国際情報学科

指導教官　松野良一教授

20G119008H

伊藤光雪

目次

1.はじめに

2.事前取材
　2.1 岡洋子さんと八島妃彩さん
　2.2 双葉町役場双葉町秘書広報課の橋本靖治さん

3.本取材
　3.1 震災遺構「請戸小学校」
　3.2 双葉海浜公園マリンハウスふたば
　3.3 自宅を売却した元浪江町民
　3.4 被災した農業作業用倉庫

4.おわりに

参考文献

1. はじめに（動機）

私が東日本大震災に関心を持ったのは、高校１年生の時である。福島県伊達市で生まれ、震災当時は小学三年生の卒業式。その後、福島市で生活していた私は、所謂「被災地」で生活しているにも関わらず、高校一年生になるまで全く東日本大震災に関心がなかった。それが大きく変わったのは、高校一年生の３月１１日、初めて被災地である南相馬市や浪江町・双葉町を訪れた時である。既に復興は完了し、そこに町があり、人が住んでいる。そう信じていた私は、人の姿はおろか、街の姿もなく、家もなく、一面草が生い茂った被災地の『現実』を目の当たりにし、大きな衝撃をうけた。そして私自身が福島県に住んでいるにもかかわらず、被災地の実情を知らなかったことを大きく恥じるようになった。

その後、毎年福島県浪江町・双葉町に足を運ぶようになり、その中で今回のドキュメンタリーにも登場した、志賀一郎（しがいちろう）さんの建物に出会った。新たに開館した、東日本大震災・原子力災害伝承館[1]。その奥に見える、津波の被害を受けたままの姿でぽつりと残されていたその建物（写真１）が、新しい施設と対比され、なんとなく気になった。そして、次第にその持ち主が今どこで何をしているのか、どんな思いで復興の様子を見つめているのか知りたいと考えるようになった。

それと同時に、年々一面草が茂っていた被災地が、アスファルトで覆われ整備されていく姿を見て、なんとなく違和感を抱えるようになった。いまだ被災地に残されている被災した建物からは見えてこない、故郷の姿や故郷への思い、復興に対する考えを知ると同時に、抱いた違和感の正体を明らかにしたい。そんな思いから、今回のドキュメンタリーを制作することとした。

写真１　志賀一郎さん所有の被災した建物＝2021 年 3 月 11 日福島県双葉町で筆者撮影

[1] 〒979-1401 福島県双葉郡双葉町中野高田 39

原発事故の影響で、全町避難となった浪江町と双葉町は、被災地の中でも、帰還困難区域の割合が非常に高い。双葉町は 95 パーセント、浪江町は 80 パーセントが帰還困難区域に指定され、長い間戻り住むことが叶わなかった。2022 年には双葉町にて、特定復興再生拠点区域の避難指示が解除された。浪江町でも 2024 年 8 月 31 日に特定復興再生拠点区域の避難指示が解除される予定である。その一方で、今なお「拠点区域外」と呼ばれる帰還が叶わない地域が多くある。今回は、そんな浪江町・双葉町内の 4 つの建物に関連する方々4 名にお話を伺った。建物の選定方法や取材対象者へのアプローチ方法を紹介するとともに、それぞれのインタビュー内容やそこから明らかになった『故郷の正体』を記したい。

写真 2　帰還困難区域の地図＝引用：　引用：【解説】東日本大震災・原発事故「帰還困難区域」ゼロからわかる福島のいま　第１１回
https://www.nhk.or.jp/fukushima/lreport/article/000/31/

2. 事前取材

今回ドキュメンタリーを制作するにあたり、まずは取材対象者を探す作業から始まった。しかし、対象者を探すのは容易ではなかった。被災地で未だ当時の姿のまま残されている建物を探し出すこと、誰も住んでいない建物の持ち主を探すこと、その建物の持ち主が話してくれるよう説得することなど、例え建物を見つけても、取材し一緒にその建物の場所まで行き話を聞くという段階に達するまで、非常に骨の折れる作業だった。打診して手厳しく断られたこともあった。

「なぜあの時の辛い記憶を思い出させるのか。もう解放してくれ」

そう言われ、一度は取材を断念することも考えた。しかし、今取材しなければ震災の経験が、被災者の思いがなかったことにされてしまう。福島市に住んでいた私ですら福島の現状を知らなかったからこそ、福島の現状をどうしても伝えなければならない。その思いから、なんとか 4 人の取材対象者にたどり着くことが叶った。

ドキュメンタリーに登場した 4 人の取材対象者の他にも、事前取材として本取材前にインタビューを行わせていただいた。以下、事前取材をさせていただいた方々の一覧となる。

① 双葉町役場双葉町秘書広報課 橋本靖治さん（2022 年 7 月 7 日取材）
（双葉町の復興の現状、帰還困難区域への立ち入りについて）
② 株式会社アドックス　齋藤信幸さん（2022 年 5 月 19 日取材）
（マリンハウスふたばでの業務について）
③ 河北新報　横川琴実さん（2022 年 8 月 2 日取材）
（志賀一郎さんの以前の取材内容について、記者の目線から見た福島の現状について）
④ 岡洋子さん、八島妃さんへの取材（2022 年 7 月 10 日取材）
（浪江まち物語伝え隊の岡洋子さん、八島妃さんへの取材）

この制作ノートでは、上記の中から、岡洋子さん、八島妃さんへの取材と双葉町役場双葉町秘書広報課 橋本靖治さんへの取材内容を記す。

2.1　岡洋子さんと八島妃彩さん

2022 年 7 月 10 日、取材チームは、取材場所として指定された浪江町にあるカフェに向かった。道中見える浪江町の駅周辺の道路などには、家がまだらに立っており、一見既に人が戻り済んだように思える。しかし、よく目を凝らしてみると、中が荒れ果て、蔓が絡まり、人がそこには住んでいないことが分かる。住民をほとんど見ることもなければ、子どもを見ることもなかった。久しぶりに訪れた被災地の様子に、私は改めて違和感を覚えた。

今回の調査対象者である小澤是寛さんが活動した「浪江まち物語つたえ隊」のメンバーである岡さんと八島さんに、同隊の活動や浪江町の復興についてお話を伺った。

浪江町で生まれ育った八島さんは、震災当日も浪江町にいた。地震の翌日、避難命令が出た時は自宅にいて、テレビで原発事故の発生を知っていたものの、危機感はなかったという。避難生活の末、最終的には、福島県郡山市の仮設住宅に入居した。同市の仮設住宅にいる間、広島から紙芝居で被災者の支援をするという団体が岩手・宮城・福島の被災地に紙芝居をプレゼントするという企画を行っていた。その一環で、仮設住宅で暮らしていた女性の被災経験が紙芝居となった。しかし、紙芝居の読み手がいなかったために、八島さんが紙芝居の読み手を引き受けた。その後、八島さんは、同じ仮設住宅で自治会長をしていた小澤さんとともに仮設住宅をめぐって、制作された紙芝居の読み聞かせを行うようになった。これが、「浪江まち物語つたえ隊」の原型となったという。その後、被災経験や浪江町の伝記を伝える紙芝居が作られるようになった。

岡さんは、震災の翌日、暮らしていた浪江町に戻った。しかし、浪江町が避難区域となったため、福島市の親戚の家に避難した。その後、避難生活が長引くにつれ、 「これは帰れないのではないか」と考え、4 年間、知人に住宅を借りて過ごした。 5 年目には浪江の一部が避難解除となったものの、家は荒れ果て、住める状況ではなかったという。そこで、自宅を取り壊し、浪江町の「帰る場所」にするためにカフェを作った。その後は、福島市とカフェ間の 70km ほどを週に 1、2 度往復している。岡さんは、被災後、「浪江まち物語つたえ隊」の前代表である小澤さんに勧誘され、「浪江町のために何かしたい」という思いから加入し、読み聞かせの活動をしてきた。バラバラに避難した浪江町の住民の仮設住宅を巡って読み聞かせを行う過程で、住民が少しずつ笑顔を見せるようになったという。二人はまず、震災当時の様子について語った。

（岡さん）「地域で声をかけあった人は助かったが、一家で固まってしまった人はみな流されてしまった。震災の死者には餓死も多いと思う。津波から生き残りの捜索を待ってはいたが、浪江役場から余震や原発の影響で捜索をするなという指示が出ており、消防団は助けを呼ぶ声を前に捜索をすることができなかった」

（八島さん）「大平山の霊園の碑には請戸出身ではない人もいる。津波警報が出てから、自分の家族を迎えにいったことによって亡くなった方なのだという。ある女性は息子・家族がみな流されてしまったという。その息子さんの妻が介護の必要な体で、請戸の施設に通っていた。他の場所の幼稚園に通っていた子供など、その息子さんは家族を迎えに行こうとしたため、息子夫婦が全員流されてしまったとのこと。津波の前では家族を迎えに行くことすら難しい。地震の怖さは津波だけではない。避難警報が出たなら近くの避難できるところ に（逃げられるように）普段から備えておくことが大事」

2人は、震災から 12 年が経った今でも「浪江まち物語つたえ隊」の活動を続け、日本各地で 読み聞かせを続けている。そこにはどのような思いが込められているのだろうか。

（岡さん）「浪江町は震災から 5 年後に（部分的に）帰還できたが、街の 80%がまだ帰還困難区域。そのため当初は浪江を元気づける目的だったが、続ける中で、しだいに浪江そのものを伝える目的に変わった。『震災の真実を伝える』という気持ちで活動していたら、いつの間に時が経っていた」

（八島さん）「最初は昔話で仮設住宅の住民に昔のことを懐かしみ交流して貰うことを目的としていたが、震災の紙芝居を作ってからは、そのうち、県内外から『知りたい』『聞かせて欲しい』という声を貰うことになり、活動が次第に県外にも広がって行った。ニュースでは伝えていなかったことを教えるため、全国の多くの人に紙芝居を伝達手段として、震災の真実を伝え、教訓を残すとともに、浪江の復興の感謝を伝えたい気持ちが今はある。あまり時間が経ちすぎると、うやむやになってしまう。そのためなるべく早く震災の記録を残しておかないと話がねじれてしまう恐れがある」

写真 3　紙芝居を披露する八島妃彩さん＝2022 年 7 月 10 日、浪江町内で筆者撮影

2 人は現在の町の姿、そして復興についてどのような思いを寄せているのだろうか。

（岡さん）「町が直り始めたからといって復興ではない。ジャングルのような被災地が残されていること、働き口がないこと、浪江町の色々なことを、活動を通して知ってもらいたい。自分たちも全てを知っているわけではないが、OCAFE がそのための場所になると嬉しい。自分たちも家族を失っていたらこうしていられたか解らない。家族を失った人たちの気持ちは寄り添えることではないが、だからこそ自分たちが語り続けることが大事」

最後に、この活動をいつまで続けるのか。お二人に伺った。

「私達が（顔を見合わせて）歩けなくなるまで」

「字が読めなくなるまでかな。折角頂いた宝物なので、歩けなくなっても誰かに（車いすなどに）乗せて貰って続けたい」

写真 4　震災以前の浪江町について語る八島妃彩さん（左）・岡洋子さん（右）＝2022 年 7 月 10 日、浪江町内で筆者撮影

2.2 双葉町役場双葉町秘書広報課の橋本靖治課長

2022 年 7 月 5 日、双葉町役場双葉町秘書広報課の橋本靖治（はしもとやすはる）さんに、ズームで双葉町の復興の様子・震災前の双葉町についてお話を伺った。橋本さんには、マリンハウスふたばで被災した桑原信一さんを紹介していただき、マリンハウスのある帰還困難区域内に立ち入る際に同行していただいた。

橋本さんに最も伺いたかった話は、今なぜ双葉町・浪江町町内で、未だ建物が解体されずに残っているのか、それらの建物はどうなってしまうかについてだった。震災 後の双葉町町内の様子について、橋本さんはこのように説明する。

「2011 年に震災があって僕たちは町内全員が避難することになりました。今、避難指示解除がされようとしていて、ようやく町に戻れるようになるまで、その間 11 年間かかっています。例えば半壊とか全壊とか、当時震災の影響を受けた建物も相当あるのですよ。地震で 11 年前に建物が揺れて、瓦が落ちて、そこから雨漏りして家が痛みました。野生の動物イノシシとかアライグマとか狸とかで、そういう有害鳥獣というものが建物の中に侵入したりして、建物がこの 11 年間の間にだいぶ傷んだり荒らされたりしています。

避難指示を解除する前に必ず除染という作業をします。放射性物質を綺麗にするクリーンアップのことです。放射線物質を取り除く作業をして始めて、インフラの整備が始まります。ここ３～４年前から建物の家屋の除染作業が進んできて、家屋を持っている方は建物を除染するか解体するか、どっちにしますかというのを選ばなければなりません。

例えば『いずれ双葉に戻ります。除染してください』というと環境省が除染してくれます。ただ一方で、『もう建物が傷んでいるから除染しなくて良いよと、私もう双葉に戻る予定もないし、自分の子どもたちももう戻ることもない、なので解体してください』という人もいるんです。解体するっていう選択をする方が、（町内で）だいたい９割くらいです。

要は、建物が傷んだり、動物に荒らされたりしているのでもう誰も住まない。そのため９割くらいが建物を解体してしまっています。あとはもう手つかずとなって建物が残っているというところもあります。そういった中で、何が問題になるかというと、建物がなくなって、もうしばらく人が住まないという空き地が駅前にすごく広がっているんです。もともと駅前だからお店があったり住宅があった、そういったところが今もう更地になっちゃってます。ここに向けて前に僕ら動いているんですけれど、そこが更地になっていて元々何があったか分からないような状態が今の状態です」

写真５　双葉町の現状について語る橋本靖治さん＝2022 年７月５日、筆者撮影

「除染するか、解体するか」、今なお悩んでいる方もいるのではないだろうかという疑問を尋ねたところ、このような答えが橋本さんから返ってきた。

「います。今の時点で、除染も解体もお金を自分で払わずに環境省がやってくれています。ただ、（環境省のお金で）一度除染してしまった建物は、今度解体をするときには自費でやらなければなりません。

環境省は除染にお金をかけるので、『除染した家をやっぱり解体してください』と言っても、二重でお金を払うことを環境省はしないということです。なので、どっちかを選べとなったときに解体を選ぶというのはそういうことです。

もう一つ、今お話の中でどちらにするか迷っているかということですよね、当然迷いますよ。なぜかというと、自分は住まないかもしれないが、『先祖代々何十代も その家に住んでいたのに俺の代でこの屋敷を取り壊してしまってもいいのか？』とか『自分の子どもにこの建物を残さなくて良いのか？』という葛藤があります。当然判断できないという方もいます。あとは、今環境省から、『避難指示が解除されてから約 1 年間の間に解体か除染するかの申請をしないと、今後は環境省は手をつけませんよ』という期限が設けられています。環境省も事業としてやっているので、期限がないと事業として上手くいかないからです。

まあ、賛否はありますよ。『国の責任でやるのに期限を設けるなんてけしからん』という人も中にはいますけれど、ただ、それは事業としては当然のことです。だいたいは、除染も解体も選ばなかった方々のお家ですね。

あとは、解体の手続きに時間がかかっているというケースもあります。2 年前くらいに解体申請をしたけど、まだ解体されていないという人もいます。その理由は分からないですよ。何らかの手続き上の問題なのか、例えば、そのエリアはまとめて解体するから何件かまとまった時点で解体をするので今は保留をしているとかね。それは環境省さんの進め方なので理由までは正確に分からないですけれど、基本的に残っている建物は『まだ、判断に迷っている』 か『申請手続きをしたがまだ手つかず』か。あと、除染して綺麗になっているという住宅もあります。今解体とか除染をしている建物があるのはそのエリア（特定復興再生拠点区域）です。町全体の面積のだいたい 1 割くらいの面積です。残り 9 割くらいの面積のところはこれから解体や除染が進められていきます。今建物の除染とか解体の話をしたのは、避難指示解除を目指している約 1 割のエリアの話です」

特定復興再生拠点区域外の 9 割の地域の除染・解体の決断（申請）の期限は決定されているのだろうか。

「簡単に説明すると、残りの 9 割は、もともとスタートの時期、帰還困難区域（人が住めないというエリア）。基本的には長期間人が住めない、まあ、五年以上人が住めないというエリアが帰還困難区域。当初環境省は、帰還困難区域は除染しないと言っていました。でも、平成 28 年の時に法律が変わって、町が、『帰還困難区域であってもある程度放射線量を低くして復興を目指していく』と申請手続きをし、それを国が認定すれば、そこを「特定復興再生拠点区域」とされることとなった。そしてそこは、帰還困難区域であるけれども、積極的に除染をしてインフラの復旧を進め、5 年を目処に避難指示を解除するという制度なんですよ。残り 9 割の帰還困難区域は昨年の 8 月（2021 年 8 月）に政府のほうで方針を示し、2020 年代をかけて『戻りたいという人がいれば、そこを積極的に除染やインフラの手続きを進めて 2020 年代に戻れるようにします』となっています。拠点区域と拠点区域以外の物事の進め方が異なるの分かりますか？「特定復興再生拠点区

域」というのは、その区域を全域除染しますっていう制度なんです。しかし、拠点外区域は全 域やりますと言っていないんです。

『戻りたいといった人が戻れるような環境にします』 と言っているから、戻りたいという人が点在したときに、点で除染とかを進めていくのか、 それはあり得ないのではないか、というのが今問題になっています。『病院がないからとか、学校がないからお店がないから』というのは拠点外とか拠点内とか関係なく、被災地の大きな課題となっている問題点です。当然、病院がないから戻れない、お店がないから戻れない。お店って人がいないところにできないですよね。病院もそうです。ビジネスで考えたときに、人がいないところにビジネスは多分成り立たないんですよ。なので、基本的にはビジネスが成り立たないところ（人がいないところ）にお店はないんです。ただ、お店が無いと困るから色々な補助金や助成金といったような形でインセンティブを与えてお店に出店してもらうこと、そういったことを一つ一つ積み上げていかないと人の生活が成り立たないというのが原発による被災地域の課題です」

双葉町で働かれている橋本さんは、復興や町づくりの難しさを日々実感しているという。

「僕自身が仕事で講演などをしていますが、ある高校生の質問で『復興の定義ってなんですか？何を持って復興といえるのですか？』という質問があった。町民7000人の元の双葉町に戻ることはないと思う。じゃあ、どのような町作りをしていくのかというのは本当に大変で、住民の方が未だに戻ってこない状況から町作りをしなくてはならない。だから、完成形が見えないところで積み重ねていくような感じです。何の計画性もないとお叱りを受けるかもしれないですよ。誤解がないように言いますけど、計画はあります。こうしたいというビジョンもあります。ただ、今私が言っているのは、その計画通りに進むかの問題です。計画に書かれたことが最終形ではないので、私が言っているのは、計画はあります。町で公表しています。しかし、その計画自体が最終形ではないし、途中でどんな問題が起こるかも分からないという課題の中で、僕たちは計画を進めているという状況です」

解体を迎えた町民の皆さんは色々な思いを抱きながら、家の取り壊しを決定しているのか。

「目の前で解体に立ち会ったということはありません。住民の方と取り壊し現場で話をするということはないです。ただ、想像してもらいたいのですが、『なんで解体しなくてはならないんだよ』という気持ちはみんな心の中にあると思います。 例えば、『4000 万円をかけて土地を買って建物を建てました、建てた家に小さな子どもと楽しく 4 年間住ん

でいました。あるとき原発事故が起きてその家に住めなくなりました。 10 年経ってもまだその家には住めません。ただ、住宅のローン 4000 万円分は東京電力から賠償されたので 4000 万円分のお金は自分の借金ではなくなりました。その建物を今度手放すことになりました。』 皆さんどう思いますか？ラッキーと思うか、残念と思うか、そこを共有できないと話は伝わらないと思います」

写真 6　被災したまま残されている建物＝2022 年 8 月 3 日、双葉町で筆者撮影

取材の最後に、橋本さんは私たちにこのような言葉を投げかけた。

「生意気を言うようで申し訳ないですが、桑原さんは生死をさまよう体験をしているので、興味本位でお話を伺うのは違うと思います。あの人は状況によっては死んでいた人なんですよ。軽い話じゃないです。だから、『簡単に体験談を聞かせてくださいね』というのは、僕自身の考えとしては軽いと感じていて、相当大変な思いをしたと思うんですよ。辛い思いを。その思いをもう一度呼び起こそうとしていると言うことは、心構えとして持っておいたほうがいいと思います。」

生半可な気持ちで取材してはならない。その覚悟はもっていたものの、改めて突き付けられた瞬間だった。

3. 本取材

今回のドキュメンタリーには、4 人の登場人物が存在する。それぞれどのようにインタビューをするに至ったのか。そしてどのような話を伺ったのかを記す。

3.1 震災遺構「請戸小学校」

取材対象者：佐藤信一さん
取材場所：元双葉町立請戸小学校（現在は震災遺構）[2]
取材日時：2022 年 8 月 6 日

高校生の時、私は被災した請戸小学校を初めて訪れた。しかし、その当時は、中が一般公開されておらず、柵の外側から小学校を見て回っただけだった。それでも、瓦礫の押し寄せた姿のまま残っている教室や給食室の様子を見ることができ、印象的だった。

2021 年に一般公開された際、私は初めて請戸小学校内を見た。土埃の被った蛇口や水を被りヨレヨレになった教科書などを見て、津波の恐ろしさを初めて知った。しかし、震災前の請戸小学校がどんなもので、関係者は被災した学校を見て何を思っているのか、知ることはできなかった。

震災遺構として一般公開される前から請戸小学校を知っていた私は、今回ぜひ同小学校を取り上げたいと考えていた。そこでまず、浪江町教育委員会事務局に連絡した。当時の請戸小学校を知る方にぜひとも取材させていただきたいと申し出たところ、紹介していただいたのが佐藤信一さんであった。早速連絡したところ、取材を快諾いただいた。

写真 7　震災遺構「請戸小学校」＝2022 年 8 月 6 日、筆者撮影

[2] 〒979-1522 福島県双葉郡浪江町請戸持平 56

私たちを請戸小学校入り口で迎え入れてくださった佐藤さん。まずは、震災前や被災後の写真が入ったファイルをめくりながら、請戸小学校に関する説明をしてくださった。大体在校生は 98 人（実際は 93 名だった）。一学年一クラス、多いクラスで 20 人あとは 10 人くらいの学校で、大体の人が幼稚園や保育園のころから父母含めて顔見知りだったという。

写真 8　佐藤信一さん＝2022 年 8 月 3 日、筆者撮影

学校内を案内してもらいながら、震災当時の様子を佐藤さんから伺った。長い横揺れを、当時の小学生たちはこの建物で、どのような気持ちで耐えていたのか。当時小学 3 年生だった頃の私の記憶も蘇ってきた。

請戸小学校と対比して、よく名前が上がるのが、石巻市立大川小学校。大津波により児童 108 名中 74 名・教員 10 名が亡くなった小学校である。では、なぜ請戸小学校は、全員が助かることができたのか、佐藤さんに尋ねた。

「大川小学校のようになってもおかしくなかった。その時のうまい具合の巡り合わせで。いい人に声かけてもらったりしながら。助けてもらったんだよなあって感じで」

一瞬の判断で、生死が決まった―高校生の頃、私が南相馬市を訪れた際に、津波で夫を亡くした女性が言った言葉を思い出した。大川小学校も請戸小学校も、どちらが死亡者を出してもおかしくなかった。その現場の緊迫感を、佐藤さんの言葉から感じることができた。

3.2　双葉海浜公園マリンハウスふたば

取材対象者：桑原信一さん（元ふたばマリンハウス現場責任者）

取材場所：マリンハウスふたば[3]

取材日時：2022 年 8 月 3 日

---

[3] 〒979-1411 福島県双葉郡双葉町郡山北磯坂 100-2

浪江町・双葉町において、なにかほかにも被災後のの残存している建物がないか探した。そして、マリンハウスふたばをみつけた。YouTube 上で公開されていたマリンハウスの中を見て、ここまで津波の被害をうけたまま残されている建物があるのかと衝撃を受けた。それと同時に、いまだ帰還困難区域の中にあるという点で、この建物に愛着を持っている人々は何を感じているのか、知りたいと考えた。まず双葉町役場　復興推進課に連絡し、マリンハウスの管理業務をしていた株式会社アトックスの中で、その業務に携わっていた方を紹介していただいた。齋藤信幸さんだ。齋藤さんには、事前取材をおこない、取材当日は、マリンハウスふたばで津波を被った桑原さんを一緒に連れて行くとの話になっていた。しかし取材当日、急用により、斎藤さんが取材に同行できなくなり、桑原さんのみを取材することとなった。

福島第一原子力発電所から約 3 キロメートル北に位置する双葉海水浴場。福島県で唯一、環境省が定める「海水浴場百選」に選ばれた。この海水浴場の海の家として人々に愛されていた建物が「マリンハウスふたば」である。「マリンハウスふたば」は、双葉町町営で、温水シャワーやトイレ、休憩所などを無料で提供しており、震災以前は国内外を問わず人々が集まる活気溢れる施設だった。

写真 9　津波に襲われたマリンハウスふたば＝2022 年 8 月 3 日、筆者撮影

私は、帰還困難区域内に立ち入ったのは、初めての経験だった。帰還困難区域に入ってもそれほど景色が変わらなかったことが意外であったものの、やはり静かだった。すれ違う車のほとんどが作業を行うトラックだった。

初めて、目の当たりにするマリンハウス。外側からはそれほど被害を受けたようには見えないものの、中は津波を被った当時の姿のまま残っていた。タイルが割れた階段、割れた窓ガラス、横に倒れた自動販売機。建物のここまで荒れ果てた姿を見たのは初めてだった。桑原さんは、「荒れた姿を見るのが辛くて、震災後訪れた時もマリンハウスの 2 階までは訪れなかった」と話した。かつての自分の職場がこれほどまでに悲惨な状況になったことを目の当たりにした辛さを感じた。

桑原さんは、取材対象者の中でも、特に浪江町に対する愛着が強いように感じた。なんとしてでも浪江に帰りたいと、最も強く願っていたのが桑原さんだった。

「浪江町が更地になってしまい、どこに何の建物が建っていたのか、わからなくなってしまった」

桑原さんのこの言葉が最も心に残った。そこで、桑原さんは故郷を失ったのみならず、「故郷の景色」さえ失ってしまったのだということに気づいた。更地になった街を訪れた時、被災者たちは、以前自分が住んでいた場所をどのように判別しているのか疑問に思ったことがあった。「そもそも判別できない」と、その答えを桑原さんから得ることができた。震災・原発事故により故郷の景色が急に真っ白に消されてしまった。桑原さんに取材して、初めて被災者らは、「故郷の景色」すら失われてしまったことを知った。

写真 10　浪江町内の復興について語る桑原信一さん＝2022 年 8 月 3 日、筆者撮影

3.3　自宅を売却した元浪江町民

取材対象者：小澤是寛さん

取材場所：小澤是寛さん宅（福島県相馬市内）

取材日時：2022 年 8 月 4日

小澤さんは高校時代からの友人に紹介してもらった人物である。その友人は、小澤さんが浪江町の家に定期的に通っていたときに一度その家を訪れていた。本来は、小澤さんの浪江町の自宅で取材を行うことを考えていた。しかし、小澤さんに連絡したところ、既に浪江町の自宅を売り払っていたとのことだった。取材を快諾いただいたものの、なぜ浪江町の自宅を手放したのか、疑問が残った。その答えは、8 月 4 日の取材で知ることができた。

写真 11　被災前に住んでいた浪江町の住宅の写真をバックに語る小澤是寛さん
＝2022 年 8 月 4 日、相馬市内で筆者撮影

小澤さんの自宅を訪れ通された部屋の壁に飾られた写真が、まず目に入った。きっと浪江のかつての自宅に違いない、そう考えた。小澤さんは、「浪江まち物語伝え隊」での活動でよく知られた人物だった。そのため、小澤さん自身の被災経験や、自宅の話については、あまり取材されてこなかった。取材中、伝え隊に関する質問は、すぐに答えてくれたものの、自宅の話については、なかなか答えようとしなかった。だからこそ、自宅の話にこそ、本音が隠されているのではないか、そう考え、自宅の話を中心に伺うことにした。

まだ浪江に戻る気はあるか、そう聞いた際、小澤さんは即答した。

「もう戻る気はない」

一度小澤さんの浪江町の自宅の映像を見たことがある。大きな暖炉のある立派な住宅だった。そのため、私は、自分が建てた家に思い入れがあるのだと考えていた。しかし、小澤さんが本当に大切にしたかったものは、「人々との絆」だった。だからこそ、小澤さんは、もう戻る気はないと即答したのだと知った。もう絆が元には戻らないと確信していた。

小澤さんを取材し、11 年間の復興の中で、小澤さんは見過ごされてきたのだと感じた。新しい工業やイベント、道の駅など施設が建設され、道路が綺麗に整備された。それだけでいいのかと、私が抱いた疑問の正体を、小澤さんが教えてくれた瞬間だった。被災者たちの願いが置いてきぼりになったまま、復興が進んでいるのが現状なのだと、知ることができた。

浪江の自然とともに過ごしたいという桑原さん。人々との絆がない場所には戻れないという小澤さん。「帰還したい」「帰還したくない」との観点でいえば正反対である。しかし、2 人に共通することがある。それは、これまで大切にしてきたことを、これまで通り大切にしたいだけだということだ。その願いが未だ叶っていない、その悲しみを目の当たりにした。

3.4　被災した農業作業用倉庫

取材対象者：志賀一郎さん

取材場所：志賀さん所有の農地や以前使用していた農作業用の倉庫など
取材日時：2022 年 8 月 5日

四人目が志賀一郎さん。今回のドキュメンタリー制作のきっかけとなった建物の持ち主である。まず、建物の場所と見た目はわかっているものの、持ち主の名前は知らなかった。そのため、「伝承館　近く　建物」などと検索し、ようやく志賀さんを取り上げた河北新報の記事にたどり着いた。記事に載っていた名前をインターネットで検索すると、農林水産省関係の名簿を発見。該当部署に問い合わせしたものの、連絡先は知らないとの返答だった。そのため、河北新報社に連絡し、連絡先を紹介いただけないか交渉。河北新報の横川琴実記者から連絡先をいただいた。早速志賀さんに電話したが、「もう年だから」となかなか取材を快諾してくれなかった。そこで、何度か電話し、日常会話をしながら現地での取材を依頼し続けた。結果、現在住んでいる名取まで車で迎えに行く条件で承諾いただいた。

写真 12　志賀さんの倉庫＝2021 年 3 月 11 日、筆者撮影

名取市から双葉町に向かう車内で、志賀さんは、今も農業雑誌を購読していること、また双葉町に戻って農業をやりたいことを語った。双葉町を訪れることができることを、心待ちにしている様子だった。

しかし、車が進めば進むほど、志賀さんの表情は曇っていった。かつて、稲作をおこなっていた土地が草で覆われた姿を見て、絶望の声をあげた。志賀さんによると、数ヶ月前に訪れた際には、ここまで草で覆われていなかったという。しかし、その年、雨の日が多く、手入れされずに残された土地は、草ぼうぼうとなり荒れ果てた姿になってしまった。

自分自身の土地を祈念公園にはさせないと語る志賀さんから、被災者の声が行政に届いていないのが現状だと感じた。被災者が置いてきぼりとなったままで、進む復興はいったい誰のためにあるだろうか、鬱蒼と草が茂る農地。その姿を見つめる志賀さんの横顔を見て、そんなことを感じた。

志賀さんの取材をして感じたことがもう一点ある。11 年経過しても、被災地を取り巻く状況は、刻一刻と変わり続けているということだ。だからこそ、毎年 1 回、3 月 11 日にだけ注目されるだけでは、見過ごされる被災者の思いがある。取材後、行きの時よりもずいぶん小さくなった志賀さんの背中が、名取市に消えていくのを見ながらそう感じた。

写真 13　「先祖代々受け継いできた土地は諦められない」と語る志賀一郎さん
＝2022 年 8 月 5 日、双葉町内で筆者撮影

4. 終わりに

東日本大震災から 11 年が経過しても、浪江町・双葉町には町らしい姿は戻っていない。アスファルトが敷かれ、新たな施設や工場が海辺・駅周辺などの建設が進むその様は、確かに数年前の土が剥き出しとなっていた姿からは復興が進んでいるかもしれない。それでも、地震や津波の被害に遭った建物は、当時の姿のままになっており、人が戻らぬ町の実態があった。未だ浪江町・双葉町は復興の歩みの中途にある。今後、このような地震や津波の被害に あった建物も全て解体され、新たな施設や町の姿が戻る日が来るかもしれない。しかし、だからこそ、復興を進めていく上で、震災・原発事故によって失われたものに対して、ますます目を向けることが重要だ。かつての町の姿や人々との繋がりはもう元には戻らない。

被災者が近隣の住人や友人との絆や代々守り続けてきた農業など目には見えない「心の故郷」こそ、津波・原発・事故により真に奪われたものの正体だったということだ。だからこそ、どれほど新たな工場や産業が参入し、震災や復興の足取りを伝える施設が建設されようとも、被災者の声に耳が傾けられなければ、本当の復興につながるわけではない。今回の調査を通じ、高校生の時に抱いた違和感の正体だった。住民たちが失った 「心の故郷」に目を向けることで、住民らが本当に望む復興の姿が見えてくるはずだ。

参考文献

<Web>

・震災遺構 浪江町立請戸小学校 ホームページ（最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://namie-ukedo.com/about/

・南相馬川房復興委員会（最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://revive-fukushima.com/marine_house_futaba/

・福島県復興祈念公園空間検討業務委託の公募型プロポーザルの審査結果について （最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://onl.la/DF3GN3q

・【初めての方へ】すぐわかる浪江町（なみえまち）の現況 （最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://onl.la/EuE7yvG

・浪江町の概況について 令和 2 年 8 月（最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/13190.pdf

・なみえ復興レポート 令和 5 年 2 月（最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/17788.pdf

・双葉町住民意向調査（最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://www.town.fukushima-futaba.lg.jp/9246.htm

・浪江町町民の避難状況（平成 24 年 11 月 30 日現在）（最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://www.town.namie.fukushima.jp/soshiki/3/386.html

・浪江町町民の避難状況（令和 4 年 9 月 30 日現在）（最終閲覧日:2022 年 3 月 10 日）
https://www.town.namie.fukushima.jp/soshiki/3/31537.html

<報告書>

・浪江町の復旧・復興に思う事～浪江町古今～
報告：浪江まち物語つたえ隊 小澤是寛 最終編集：2020 年 8 月 8 日

＜書籍＞

・「なぜわたしは町民を埼玉に避難させたのか」 著：井戸川克隆 2015 年 4 月 13 日出版 駒草出版

・「いないことにされる私たち 福島第一原発事故 10 年目の「言ってはいけない真実」」 著・青木美希 2021 年 4 月 20 日出版 朝日新聞出版

・「地図から消される街 3.11 後の「言ってはいけない真実」」 著・青木美希 2018 年 3 月 15 日出版 講談社出版

資料（新聞報道）

掲載日:2022年08月19日,面名:EB0XX0,記事ID:K2022081900000012900
(C)河北新報社

被災地の今 伝えたい

福島出身の中央大生ら映像制作 来年公開へ

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故の被災地の今を伝えようと、福島市出身で中央大国際情報学部3年の伊藤光雪さん(20)らが、ドキュメンタリー映像の制作に挑んでいる。テーマは「震災遺構の記憶」。福島県双葉町や浪江町の家屋や学校4カ所で、所有者らの思いを取材した。映像は来年1月、動画投稿サイト「ユーチューブ」で公開する予定だ。（盛岡総局・横川琴実）

作業小屋の前で志賀さん（右）に取材する（左から）伊藤さん、杉山さん、筒井さん＝5日、双葉町

あすへ
東日本大震災

双葉や浪江に残る建物
所有者の悲痛な思い取材

伊藤さんは5日、双葉町を訪れた。現在は名取市に住む志賀一郎さん(75)が、コメ農家を営んでいた自宅跡。周囲に建物がなく、ぽつんと残る2階建て作業小屋のことを聞いた。

「小屋はこれからどうするんですか」とカメラを向ける伊藤さん。志賀さんは「残していても、さびていくだけだから壊すしかない。ただ、こんなに荒れてしまって、先祖に申し訳ない」と応じた。

津波で妻と4カ月の孫を失った。名取市から80キロ離れた自宅跡へ車で定期的に通う。雑草で覆われた思い出の地に目を向け、さみしそうに語った。

映像制作は大学ゼミの研究の一環。7月から福島県内にたびたび入り、被災した建物に関する取材を展開。志賀さんのほか、浪江町の震災遺構「請戸小」に勤務した元教諭や同町にあった自宅を手放した男性ら3人に話を聞いた。

制作の原点は4年前。福島市の桜の聖母高1年だった伊藤さんは初めて原発事故の被災地を訪れ、建物がほとんどない景色に衝撃を受けた。以来、毎年足を運ぶようになり、志賀さんの作業小屋に興味を持ったという。

志賀さんの胸中を聞いた伊藤さんは「小屋を残したいのだと思っていたが違っていた。建物自体ではなく、家族や農業への思いが強いことに改めて気付かされた」と感想を語った。

取材には、企画に共感したゼミ仲間の杉山浩規さん(21)＝静岡市出身＝、筒井有彩さん(21)＝千葉県出身＝も参加する。

杉山さんは「人々の暮らしがあったことを忘れないでいたいと強く感じた」と話す。筒井さんは「震災に対し、悲しみや怒りなど複雑な感情があることを知った。自分が聞いた話を多くの人に伝えたい」と取材の意義を強調する。

映像は1時間程度に編集して公開する予定。伊藤さんは「かつての自分のように『復興はもう終わっている』と思っている人に見てほしい。原発被災地の変化と現状を伝える記録にしたい」と意気込みを語る。